

－縄文土器－

縄文土器は、煮炊きに用いる深鉢を主体とする。草創期から早期にかけては、尖底や丸底を呈していたが、前期以降に平底が一般化していった。次第に波状口縁も顕著となり、特に中期の中部・関東においては、立体的な物語性文様が施される。後期になると過剰な装飾は見られなくなったが、この時期に広く認められる磨消縄文は、晩期以降も引き続き多用された。晩期には、東日本の亀ヶ岡式土器と、西日本の磨研土器が対峙する。